

常磐松文庫蔵 『九条家本源氏物語聞書』 解題拾遺（二）

野村精一
渡辺道子
徳岡涼

はしがき

さきに、此の稿執筆者の一人徳岡の調査にかかるところを「調査報告四十七―六」として報告したが、その後の調査により、関わる新たな資料を得たので、ここに「調査報告四十七―八」として補うものである。以下、徳岡新稿により若干の筆を加えた。

1

先に、本調査報告四十七―六（以下前稿）において、『岷江入楚』成立以降の、通勝講釈について触れるところがあったが、その中では『岷江入楚』の空蟬巻の記事、『九条家本源氏物語聞書』（以下『九条家本』）による記載事項と、更に通勝歌集からのものに留まっていた。しかしながら、中田武司氏の『源氏物語古注集成15 岷江入楚』¹（第五巻）には京

大中院文庫『岷江入楚』（中院／V／33）は、現在インターネットで公開中（<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/>）に慶長年間の記載が紹介されている。同書によれば更に新たな記事を見出すことが出来る。

本稿では、中田氏の報告された記事に検討を加えると共に、新たな報告を試みたい。

2

以下前稿のなかから通勝の源氏物語講釈に関する記事を改めて順に抜書きすると、

慶長八年十一月九日於

水無瀬読之時身もうく

思ひハてぬと

小君の心に面白也

猶又可案之

〔岷江入楚〕空蟬卷・中院／V／33

慶長九閏八月二日於水無瀬殿 素然

〔九条家本〕第一冊・六一丁表・末摘花

紅葉賀の巻の「心ぐるしうて」の肩付に「閏八三日」と存す。

（同・六七丁表・紅葉賀）

慶長十三年二月廿三日 水無瀬殿 中院殿也足軒講釈此卷より讀ハしめ給ふ心は

此卷は祝言也桐壺ハ不祝言なりこれゆへニ此卷を初二よミ給り

若箏斎ニいさ、か聴今説ノきりつほを最初ニ書きたるも心を付て見へき事と心前申されけり

(同・第三冊・十三丁表・初音)

慶長十三年四月一九日ニ御講釈終先年称名院の御講釈も今日終と御物語也

今日石山の御縁日ニよりて也

(同・第五冊・八八丁表・夢浮橋)

同(慶長) 十三年水無瀬にて源氏終功の時

打ちわたすその名ばかりはいかならん我が身にたどる夢のうきはし

(通勝家集)

しかし、その他に中田武司氏が通勝自筆の『岷江入楚』(中院 / v / 33) を調査され

夕顔卷の「たのもしけなしや」に首注として「草子地也 慶長九年十一」

紅葉賀卷の「ちのかきり」に首注として「ちのかきり 私今案無文ニ地ハカリ織ル義然ヘシ 慶長九十廿一於藤松」

とあることを報告されている。

右の中で目をひくのは、紅葉賀巻のなかの「於藤松」である。

これまでに取り上げてきたものは水無瀬にての通勝講釈に限られていたのだが、「藤松」では別の場所あるいは人物を示していることになる。

依て、中院家あるいは細川家近辺を探ると、藤松に関して、細川筆頭家老松井家の家老を務めた家に竹田家の存在が浮かび上がる。

竹田家三代藤松は、母が松井康之の妻自徳院の妹に当たるといふ縁もあり、松井長助定勝（?）一六四七と名を改める。松井康之から竹田藤松への知行宛行状には、藤松の名を見出すことが出来る²。

以貳ヶ村之内七拾五石

以市場村之内五拾石

都合百貳拾五石進

之候 全御領地

肝要候 恐々謹言

天正十五 松井新介

十二月十九日 康之（花押）

竹田藤松殿

御泊所

この知行宛行状は康之が丹後国二ヶ村（現在の京都府加佐郡大江町）の内七十五石、市場村（現在の京都府船井郡和知町）の内五十石を竹田藤松に与えたというのである。そのどちらかについて藤松といっている可能性が考えられる。

定勝は文禄の役に際し康之に従い朝鮮に渡り、岩山城攻にて活躍し、慶長三年（一五九八）二十七石七斗を加増されている。

細川家は慶長五年（一六〇〇）に徳川家康より忠興に豊後速水郡・湯布院六万石が与えられ、康之は豊後国杵築城の守衛の任に就く。藤松自身は、濃州岐阜城攻、関ヶ原の戦に参陣し、慶長七年（一六〇二）その功により松井家から豊後国田原庄杵懸村の内都合七百石の知行を賜っている。

『岷江入楚』の記事はそれより二年後の慶長九年のものであるので、竹田家の丹後における知行を直ちに比することは避けたいが、家老松井は細川の家老ということだけあって、現在も実隆自筆の『伊庭千句』をはじめ細川幸隆筆の『つれづれ草』、室町期写本である『詞花和歌集』や『伊勢物語』、あるいは、桃山期写の『源氏物語』など古典籍を多く蔵している。その様な文事に通じた背景を考え合わせても、その家老であった藤松を一人の候補として挙げておくことはあながち見当違いではなからう。

問題は、これは水無瀬講釈と一連のものであったのか、別のものであったのか否かである。なお判断の限りではないが、後に触れたい。

また、これまで未確認であった記事が空蟬巻に存していることもここに補しておく必要が有ろう。

すなわち通勝自筆本の『岷江入楚』十九丁目の袋綴じの袋中に縦二六糎×横八・五糎の紙片が綴じ込まれているのである。紙片自体が虫損をともない、また袋綴じのなかの調査でおぼつかない面もあるのだが、ここに出来る範囲での報告をしておきたい。

慶長十二年七月四日件更何れみる□□□時今案也

あさましかりしにとかくまきはしてもー

此段あさまかりしにとかくまきはしてもとは今夜ハ荻へゆつりて

蟬か文さしにはあらぬやうにしなしたれとも如何 蟬くしさしとハ

人々しるへし されはつみさり所なしといへるにや 前ノ詞にも何とらん

人ハ心□□□とあれは皆人々は志は改と可然といへる(虫損)

可思案之

慶長三年成立といわれる通勝自筆の『岷江入楚』には書入れが存しており、その後の通勝講釈が書入れられていったことは周知であるが、右の紙片の存在も、その証左に他ならない。

なお、右の紙片が袋綴じの中に綴じ込まれたのは、『岷江入楚』成立当時のものというより、後補の折のことであった

と推される。通勝自筆の『岷江入楚』は焼損甚だしく、裏打ちがされており、その時に誤って綴じ入れられたと思われる状態であるからである。

ともあれ、『岷江入楚』はそれ自体が、完稿の後も講釈の成果を踏まえた書き入れや、あるいは付箋による増補を繰り返しているのである。

4

水無瀬における通勝講釈の終功のことについて、井上宗雄³氏が、次の九大細川文庫の『源語秘訣』奥書を引き合いに出して八月のこととされる。

源孝子^{ついで}
浅井左所望之間
矣馬助 終源氏物語一部講席之功後感甚懇志 附而比別勘 是為補愚之短才矣也

これに八月十一日の也足奥書があることから井上氏は水無瀬の一連の講釈の終功と見なされたのである。しかしながら、『九条家本』の記事により、水無瀬の終功は、慶長十三年四月十九日のことであった。

とすると『源語秘訣』における講釈は別の席であったと考えたいところである。水無瀬殿における講釈は『九条家本』に見る如く全帖に渡る。しかし、『源語秘訣』奥書に記すそれは「源氏物語一部講席」とあることから別の講釈であったろう。

先に記した「於藤松」の記事も水無瀬講釈と平行してたまさかに行われた講釈だった可能性が大きいのではなからうか。

もちろん、場所を転々として、一連の講釈として行われた可能性も残らない訳ではないが。

この慶長年間、講釈ばかりでなく通勝は後陽成天皇と源氏の校合に務めたり〔御湯殿の日記〕等、前稿に詳しい）もする一方、池田利夫氏により近衛信尹等筆本として紹介された寄合書の梅が枝巻奥書に

慶長十三年仲春朔書之 翌朝加如一校朱点訖 素然

とあることが報告されている。

この記載からこの寄合書は、水無瀬講釈終功直前に書写されたものであるということがわかる。

本文書写、本文の校合、講釈、注釈を平行しながら行っていた通勝の源氏学の在り方にはとるべきものが多くあるように思われる。

注

- (1) 『源氏物語古注集成15 岷江入楚』中田武司編 おうふう 昭和五九年一月
- (2) 『竹田家資料調査報告書』八代市博物館未来の森ミュージアム 平成七年三月
- (3) 井上宗雄「也足軒・中院通勝の生涯」『国語国文』昭和四六年一二月
- (4) 池田利夫『源氏物語の文献学的研究序説』笠間叢書222 笠間書院 昭和六三年一二月
- (5) 伊井春樹『源氏物語注釈書・享受史事典』（東京堂出版 平成一三年九月）にもこの辺りの事柄については詳しく年表化されている。

付記

資料の閲覧を御許可下さいました京都大学付属図書館に御礼申し上げます。
 なお袋中の紙片の調査につきましては、平成十一年十月五日からの調査の折、御許可を得ました。(徳岡)

* * *

付表

調査報告四十七—二(年報十六号所収) 正誤

頁	行	誤	正
191	4	是より已前は	是より已前は
191	12	物語の姫君	朝顔の姫君
193	8	<small>イツキ</small> 斎の宮	<small>イツキミヤ</small> 斎の宮
194	10	六条ノ御息ト此かたは	六条ノ御息ト此御かたは
206	18	心たからおもへるに	心たかうおもへるに
216	7	此人をえけたず	此人をえけたず
223	19	田舎人——	田舎人——
224	3	己下種、の事なるへし	己下種、の事なるへし
226	11	御後ノ悔ノ御心也	御後悔ノ御心也。

231 18 ものさはかしく障なきと也
 233 6 引寺
 233 6 「寺」ハ「詩」カ
 235 21 前齋院宮御まいりの事
 236 19 此度なり
 240 23 わたり項事——
 242 21 給也
 243 8 天のとかめあるにや
 244 11 思惟ノふかき也源氏我ト
 245 17 致仕御方也
 246 2 さるは御位のほとより——
 249 1 河海已下ニ委
 249 1 夕霧は花ちるの御子分なして
 東の院にてさせ給り
 249 11 夕きりの御おぢや
 250 8 今かしこにわたし奉んおん
 252 17 末座に侍て聴聞
 253 16 学道の哥は
 254 1 舞妓の装束ノ日は

ものさはかしく隙なきと也
 引之
 《削除》
 前齋院宮御まいりの事
 此度なり
 わたり給事——
 給ふ也
 天のとかめある也
 思惟ノふかき也源し我ト
 致仕北方也
 さるは御位の程より——
 河海已下ニ委
 夕霧は花ちるの御子分になして
 東の院にてさせ給り
 夕きりの御おぢ也
 今かしこにわたし奉んてん
 末座に侍て聴聞
 学匠の哥は
 舞妓の装束辰ノ日は

258 13 れいならひにければやすく

264 20 紫上也分御詞なり

265 19 羿も疎ミしければ

267 3 我もをる也

267 12 かとめひたるところ――

267 14 くじのたうれ――

267 15 実ほうなる

268 19 うらめしかンべいひ事そかし

269 2 夕霧の葵上ニ似ぬ事也

れいならひにければかやすく

紫上也則御詞なり

契も疎ミしければ

我をる也

かとめひたるところ――

くじのたうれ――

実ほうなる

うらめしかンべいひ事そかし

夕きりの葵上ニ似ぬ事也

調査報告四十七―七（年報二十二号所収）正誤

正

21 1 源氏物語註釈史

源氏物語註釈書